

才の木資料 1

十一面観音 梵名 ekādaśamukha エーカダシャ・ムカ
観音菩薩の変化身のひとつ。
文字通り「11の顔」の意味で唐代の玄奘訳『十一面神呪心経』に示される通り、10または11の顔を持つ菩薩像。中国、日本で盛んに造られた。
日本では奈良時代から造像・信仰は行われている。
最古は法隆寺金堂壁画に描かれた十一面観音像。
彫像としては聖林寺、薬師寺、大安寺など奈良時代の作品が残る。

遣唐使の廃止後、9世紀末あたりから日本の古代信仰と繋がり、
十一面観音像は天候や雨水を支配すると信じられるようになる。
地蔵は「大地に万物を生み、諸宝を蔵する」と云う意味であり大地豊穡の神と同義で磐座を象徴する造形と考えられる。
十一面観音像と地蔵菩薩の表現を組み合わせる形で豊穡の祀りを表す。

天（天津神）降りる→依り代（神籬）・霊木
地（国津神）生れる→磐境（磐座）・巨石

神籬（ひもろき） 神祭りの神坐
依代（よりしろ） 神霊が出現するときの媒体となるもの
雷（かみなり）（いかずち） 神鳴りの意味 神成
神木（しんぼく） 神域に有る樹木の総称
注連（しめ） 神の居る地域を示す、糯米の稲藁で編まれる。
紙垂・四手（しで） 注連縄・玉串などに付けて垂らす紙、形は稲妻
鬼門（きもん） 鬼の出入りする門の意、北東の方角、中国で始まった考え

四神（青龍・朱雀・白虎・玄武）の表現
中国の神話 天の四方の方角を司る霊獣である。
東→青龍 南→朱雀 西→白虎 北→玄武